

# チャペルだより

第 212 号  
2024. 9. 15

後期主題 「私をふりかえる」(ルカによる福音書15章11～20節)  
“Reconsider yourself.” (Luke15:11-20)

主題聖句

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」

編集 広島女学院大学宗教委員会

〒732-0063 広島市東区牛田東4-13-1 TEL (082) 228-0386代  
http://www.hju.ac.jp/ E-mail:hjucac@gaines.hju.ac.jp

## 「私をふりかえる」 “Reconsider yourself.”

大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳

聖書をはじめ、物語は様々なイマジネーションを読み手に与えてくれます。それはモノを通して広がることもありますし、登場する人物を通して異なることもあります。どの人物の視点でその物語を読むか、誰に感情移入して物語の世界に入っていくか、あるいは反対に、どの人物に対して異質感を持つかによって、読むたびに物語は様々なイマジネーションを醸し出してくれます。

物語の中身は同じでも、10代の時に受け取った印象と、年を重ねて読んだ時に受けとるイマジネーションは必ずしも同じではありません。人によっても多種多様です。物語は読み手の経験や心情によって、様々な味わいを提供してくれます。

今年度の後期主題は「放蕩息子のたとえ」(ルカによる福音書15章11-32節)から選びました。皆さんはこの物語を読むと、どんな情景が浮かぶでしょうか。わたしが注目するのは(個人的主観です)、このたとえ話に現れる「履物」です。聖書の中には「履物」という言葉が時々出てきます。おそらくこれは、革製のサンダルのことではないかと思えます。イスラエルの2000年前の遺跡などからはストラップ付のサンダルが出土するのですが、放牧を生業のひとつとしていた古代の中近東の人々にとって、履物は革のサンダルが一般的であったでしょう。

サンダルは自由の象徴を表現しているともいえます。放蕩息子のたとえ話では、遠い国に旅立って父親からもらった金を放蕩の末に全て使い果たし、食べるものにも困った次男が登場します。彼は、ある人のもとで畑にいる豚の世話をするという生活を送っています。いってしまえば、放蕩息子は奴隷のような存在になって、その日その日の食べ物をなんとか手に入れる生活を送るようになります。

それでも腹は満たされることはなく、ふっと、息子はかつて父親の元で暮らしていた幸福なときを思い出します。そこで彼はもう一度、父親の元へ帰って許しをこきます。すると、父親は帰ってきた息子を温かく迎えて、一番良い服と指輪を与え、そして「足に履物を履かせよう」と言います。

貧しい生活の中で、放蕩息子はとっくの昔に自分のサンダルを無くしていたのかもしれませんが、あるいは、畑の豚を世話する彼は素足で労働することに慣れてしまっていたのかもしれませんが、貧しい生活をするなかで、とても新しい履物を買うことなど出来なかったのかもしれませんが、いずれにしても、サンダルを履かない素足の放蕩息子は、貧しく奴隷であった状態、あるいは豚の世話人であったことを思い起こさせます。泥や豚の糞にまみれて、真っ黒になった放蕩息子の足が目に見えなくなります。

そんな息子に対して父親が与えたものは、彼の愛情から出たものであったでしょうし、履物を履いた息子は再び父親に家族の一員として迎えられて、奴隷から自由の身へと変わることを象徴でもあります。父親からもらったサンダルを履いて、再び息子は新たな人生を歩き始めることになります。

そんな放蕩息子をよく思わない人物がいます。兄です。帰ってきた弟を父親がねぎらい、宴会を開いているのを見ると、兄には怒りが込み上げてきます。妬みがふつふつと彼の心に浮かんで、父親に不平を言います。もしかしたら、兄は父親が弟に指輪とサンダルを与えたことに対して、自らの立場を危うくするものと受け止め、怒りすら覚えたのかもしれませんが、

なぜなら、指輪と履物は単なるモノ以上の象徴的な意味を持っているからです。古代イスラエルには履物について変わった風習、あるいは掟があったようです。旧約聖書のルツ記4章7節には「かつてイスラエルでは、親族としての責任の履行や譲渡にあたって、一切の手続きを認証するためには、当事者が自分の履物を脱いで相手に渡すことになっていた。これが、イスラエルにおける認証の手續きであった。」とあります。履物は自分の責任や権利を代表するもので、それを譲渡するということは、いわば証文を相手に渡すことを意味することになります。

父親が放蕩息子に与えた指輪はどうでしょうか。古代、指輪は権威の象徴でしたが、装飾と同時に名前が彫りこまれた印章の役割もしていました。父親が弟に指輪を与えるということは、今でいえば実印を渡すようなものです。父親が弟に履物と指輪を与える姿を見た兄は、父親が家族の信頼や財産を弟に任せようとしていると受け止めたのかもしれませんが、それを兄が怒るのも当然かもしれません。

放蕩の限りを尽くし、金を使い果たして帰ってきた弟と、まじめに働いていた兄・皆さんはどちらに同情するでしょうか。おそらく、多くの人が兄の肩を持つかもしれません。弟は失敗に気づいて「我に返る」のですが、はたして弟は本当に反省したのか、兄にはわかりません。「やれやれ」と思っているかもしれないし、「ラッキー！しめしめ、してやったり」と思っているかもしれない。真面目に暮らしてきた兄にしてみれば、父親の気持ちが理解できないのも分かります。

イエスはこのたとえ話を「神様はどんな存在なのか」ということを伝えるために語っています。放蕩息子は心を悔い改めたことによって、父親のもとへ帰ってきたと言えますが、ここで重要なのはその息子を待っていた父親の姿です。

「悔い改める」はギリシャ語ではメタノイアといいますが、その意味するところは「後で考えを変える」ということです。わたしはこの言葉の意味するところに、いつも救われる思いがします。考え直す時間を与えてくれるし、悩んでいる間、ずっと誰かが待っていてくれる。そんなことって、なかなかある事ではありません。

放蕩息子が後で考えを変えることができたのは、故郷で待っている父親の愛があったからです。父親にしてみれば、相続権などの律法で結ばれる関係以上に、死んだと思った息子が帰ってきたことが大切でした。それに納得できない者もいるかもしれないが、あえて、父親はその愛情を放蕩息子に与えます。

放蕩息子が新しいサンダルを履いて新しい人生を歩きだすことができたのは、その足元を見守る父親、すなわち神の愛があればこそといえます。

放蕩息子と彼を温かく迎えた父親、そして快く思っていない兄。今の皆さんだったら、誰の心情が理解しやすいでしょうか。「聖書はよくわからない」という声をしばしば聞きますが、父親の行動もわからない事の一つかもしれません。でも、もしかしたら、その父親の気持ちが痛いほど理解できる時が来るかもしれません。自分自身を振り返り「後で考えを変える」とき、だれかの愛情に包まれていると気づいたとき、あるいは、放蕩息子の父親と同じ立場になったときなど経験することが今後あったとしたら、この物語を思い出してみてください。



# 秋期宗教強調週間

## 特別講演会講師

チャン ウ ソン  
**張 宇成** 先生  
(日本キリスト教団 宮崎教会 牧師)



## プログラム

10月14日(月)～18日(金)は、秋季宗教強調週間です。

＊10月15日(火) キリスト教の時間 13:00～13:45(砂本記念講堂)

「私を信じなさい」ヨハネによる福音書14章1～6節

講師 張宇成(チャンウソン)先生

(日本キリスト教団 宮崎教会 牧師)

＊10月16日(水) 特別講演会 13:00～14:30(砂本記念講堂)

「絶対に戻れる場所がある安心感」ルカによる福音書15章11～24節

講師 張宇成(チャンウソン)先生

(日本キリスト教団 宮崎教会 牧師)

★講師を囲む懇談会 14:45～15:45(ゲーンズチャペルロビー)

＊10月17日(木) 木曜日チャペル 12:30～12:50(ゲーンズチャペル)

「パイプオルガンコンサート」

演奏：大学オルガニスト 玉理 照子先生

◆学内献血 10月25日(金) 受付 12:30～16:30(ゲーンズチャペル前)

## 講師紹介

チャン ウ ソン  
**張 宇成** 先生(日本キリスト教団 宮崎教会 牧師)

在日韓国人として京都で生まれ育つ。学校生活、社会生活に適應出来ない社会不適合者としてダラダラと生き続ける。人生の回り道、寄り道をしながら30歳で同志社大学神学部に入學、同大学院神学研究科を修了。2017年4月より2022年3月まで日本キリスト教団靈南坂教会にて副牧師。2022年4月より日本キリスト教団宮崎教会牧師、共愛幼稚園園長。幼稚園では園長として子どもと遊んだり、だっこしたりしながら子ども達の成長を見つめています。また幼稚園でのイベントなど、子ども達の楽しそうな姿を動画編集したりしています。教会ではお年寄りの方々と寄り添いながら毎日を楽しく過ごしています。また、外部の養護施設や障害者施設で礼拝をしたり、キリスト教以外の方々とも交流を豊かに持ちながら活動しています。

## 学生へのメッセージ

昨今コロナ感染症や戦争などでどんどん生きづらい時代が迫っているように思います。生きづらさを感じるということはとても苦しいことですし、不安なことですね。みなさんもこれから自分の人生はどうなるんだろうかと生きづらい時代の中で色々な不安を抱えておられると思います。そんなみなさんの人生の不安を少しでも軽くできるようなお話ができればなと願っています。みなさんとお会いできる日を楽しみにしています。

## 『こ ぼく りょう ぎん 枯木竜吟 — 永年の時を経て再び息づく瞬間』

人間生活学部生活デザイン学科 准教授 鍵山 昌信

今から約15年前、まだ独立する前の設計事務所で働いていた時にとある禅宗寺院の本堂の設計に関わらせて頂く機会があった。そのお寺は、市街化調整区域という文字通り「建物を容易に建てられない地域」に指定されるほどの片田舎にあり、本堂が無く後継ぎを得ることができず困窮していた。ここではデザイン以上に山積した課題と悪戦苦闘し、相談から完成まで実に3年という時間を住職と共に伴走していった。完成から程なくして無事に後継者に巡り合え、寺は存続し続けていると便りがあり、当時素直に嬉しかったのを記憶している。

その時に「枯木竜吟」という言葉に出会った。「転じて衰えていた物が勢いを取り戻す、再び脚光を浴びる」ことの例えを表す言葉だが、この頃からぼんやりと「文化や営みをつなげていく」ことも建築家の役目の1つのような気がしていた。

それから5年後の2015年、独立して最初の仕事は、「広島県のへそ」といわれる東広島市豊栄町というまちの小さなよろず屋「栄屋百貨店」の改修だった。幹線道路沿いのこのよろず屋は、かつて商店街の情報交換や交流が生まれる中心的存在で、再び若者と生産者の交流が生まれる場を創ってほしいという依頼だった。高齢化率が広島県内でも上位を争うほど若者離れが著しいこの豊栄町で、築100年の栄屋百貨店は、幕を閉じて以降30年近くずっと空き家だったらしい。依頼されてこの時考えていたことは、高齢化に歯止めの効かないこの地域で、生まれ変わったこの場がどのように自走し続けられるのか？という「仕組み」のことだった。

設計には1年費やした。「何」をつくるかが決まって無かったからだ。その間、生産者や小中中学

生、町役場や郵便局の職員など地元の人たちと幾度のワークショップを経ていろんな意見交換を行った。その結果、地元の農産物を提供するレストランとまちの情報を集めるラウンジを創ることに決まった。工事が始まってまず、2階の床や通り沿いの壁を解体すると、薄暗かったこの場所に、沢山の光が差し込み、心地よい風が抜けた。朽ちた柱は建物全体を持ち上げ交換し、新たな基礎と大きな土間空間を造った。するとまだ壁の無いガランドウな空間にも関わらず、休みの日に自然と産直市場が始まったり、今後の使い方の話し合いが始まったりと、地域の皆がここを「交流拠点」として認識し始めている兆しが現れ始める。それはまるで「市場」の始まりの原型を見ているようで、人と空間が再びつながりをみせる瞬間だったように思う。最後は杉の香り漂う大きなキッチンBOXを挿入し、2017年5月に100年の時を経て新たな交流拠点「豊栄キッチン」として生まれ変わった。

あれから10年経った今でも変わらず営業しており、グツグツと沸騰して出される「薬膳カレー」など、ワークショップで発案された地産食材を用いたメニューを地元のおばちゃんたちが元気に提供してくれている。また、地域の冠婚葬祭や小中学生の課外授業の場所などに広く使われている場所となった。

私はよくまちや建築物を「生き物」のように考えることがある。それから古民家の再生に何度となく関わることになっていったが、いつも「こののはじまり」はどこからだったのか明確なラインは存在しない。ただ、人が建築と関わる時間が緩やかに積み重なると、自然と古い建物が息を吹き返していくように思える。



改修前



改修後



## 学生エッセイ

## アメリカ留学を振り返って

国際英語学科3年 古川 采音

昨年、高校時代からの夢であったアメリカのUniversity of Tennessee at Martin(UTM)への交換留学が実現しました。派遣が決まったときの喜びは言葉に尽くせないものがありましたが、同時にTOEFLの基準点到達に向けて、英語力の向上に取り組む日々が続き、留学に伴う不安も感じていました。Visaの取得や航空券の手配、大学の手続きなど、すべて自分で行わなければならない、さらに初めての一人での海外渡航は大きな挑戦であり、不安要素の一部でした。

このように出国時は不安でいっぱいでしたが、到着後はアメリカでの生活にすぐに適応し、不安は自然と消えていきました。到着した頃、他の学生たちも寮に戻ってきたため、キャンパスは活気に溢れており、映画のワンシーンのようでした。翌日のイベントで新しい友人を作り、また、アメリカの大学生活の豊富なイベントに驚かされました。スポーツチームの試合観戦や、大学オリジナルグッズの配布を通じて、アメリカの学生たちが持つ母校への愛着と誇りを強く感じました。

留学中は、現地の学生たちと同じ授業を受けました。様々な学年の学生と一緒に学び、授業中に積極的に意見を述べる文化は新鮮で、当初は「完璧な英語を話さなければ」と感じるプレッシャーもありました。しかし、徐々に、英語に自信がなくても発言できるようになり、「一回のクラスで最低でも一度は発言する」という目標を達成することができました。その背景には、私が間違えた英語を話していても、揶揄したりすることなく真剣に向き合い、時には、レクチャーをしてくれた友人達の存在があったためと確信しています。

授業以外にも、日本クラブや日本語クラスのアシスタントとしての活動に積極的に参加しました。日本語教育に興味があったため、学生たちと日本のことについて語り合う時間はとても有意義でした。さらに、友人のご縁で小学校の授業を見学する機会にも恵まれ、現地の子どもたちとの交流も楽しみました。



日本語クラスのみんと

今振り返ると私の人生において、幼稚園から大学までキリスト教との関わりが多くありました。留学先でも新たにキリスト教との出会いがありました。UTMに関連するクリスチャン家族が開催してくれたホームパーティーでは、キャンパスで経験することのできなかったであろう現地の人々との貴重な出会いがありました。特に仲良くなった友人とその家族は、勉強面だけでなく、休日も共に過ごすなど、まるで家族のように温かく迎えてくれました。母国や家族友人から離れた環境にいることに留学開始当初は孤独を感じていたの、彼らには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。その優しさに触れるたび、聖書の「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉を思い出しました。また、聖書には「強く、また雄々しくあれ。恐れてはならない。彼らのゆえにうろたえてはならない。あなたの神、主は、あなたと共に歩まれる。あなたを見放すことも、見捨てられることもない。」とあります。留学中、友人は「You are always doing great work! Be yourself!」などと弱気になった私の背中を押してくれていました。プレゼン前には練習を聞いてくれるだけでなく、「実際にプレゼンを行う教室に行ってみよう」などいつも親身になってくれていました。そんな素敵な仲間のおかげで、留学中「強く、勇敢に」行動できたのだと思います。

この留学経験は、学問的な学びにとどまらず、今後の自分自身の在り方を見つめ直す大切な機会となりました。留学先で得た出会いは一生の財産であり、これからもその繋がりを大切にしていきたいと思っています。

家族のように暖かく  
迎え入れてくれた友人家族

ホームパーティにて

## 報告 第24回キリスト教主義大学ジョイント8.6平和学習プログラム

8月4日(日)から8月6日(火)まで「2024年度第24回キリスト教主義大学ジョイント8.6平和学習プログラム」を開催いたしました。対面での開催は5年ぶりとなります。関西学院短期大学、敬和学園大学、神戸女学院大学、西南女学院大学・短期大学、本学の5校から、学生・教職員あわせて15名の参加者でした。

4日はゲースチャペルにて開会礼拝・オリエンテーションを行った後、広島平和記念公園へ移動し、平和記念資料館を見学しました。また、希望者を対象に碑めぐり(案内人：本学学生課職員 松原 雅恵さん)を行いました。5日は、授業科目である「ヒロシマと平和」において行われた、Duró Ágota(ドゥローアゴタ)先生(本学助教)、西河内 靖泰 先生(本学元特任准教授・現本学非常勤講師)、松永 京子 先生(広島大学大学院人間社会科学研究所 准教授)の特別講義を受講し、また、元広島市長の平岡 敬さんより「被爆の実相」を伺いました。講義後は図書館で「栗原貞子記念平和文庫」他を見学し、夕方に参加の学生、教職員と懇親会をもちました。「原爆の日」となる6日は、広島女学院平和祈念式に参列後、授業科目「異文化理解」を受講する学生とともに、振り返りと意見交換を行いました。最後に栗津原 淳 大学宗教委員長の閉会の祈りで本プログラムは無事終了しました。なお、Web「8.6平和学習プログラム特設サイト」にて関係資料を公開しました。

プログラム終了後お寄せくださった感想やご意見の中から、次のとおりご紹介したいと思います。紙面の都合で全ての方の感想を掲載することが叶わなかったことをご了承ください。



開会礼拝での集合写真

### 敬和学園大学

人文学部 英語文化コミュニケーション学科 4年生

高橋 佳世 さん

今回、初めて広島に足を運び、現地で8.6平和学習プログラムに参加できたことを嬉しく思います。特に印象に残っていることは、広島平和記念公園での碑めぐりです。被爆したアオギリや墓石、原爆ドームを自分の目で見たことで、原爆の威力が凄まじいものであったことを感じました。79年前に一発の原子爆弾が投下された地に立ち、被爆の実相を直接見て肌で感じたことで、平和への思いがより一層強くなりました。また、特別講義において、被爆したのは日本人だけでなく多国籍の人々であったこと、核実験によって被害を受けた国や人がいること等を学びました。さらに広島女学院大学の学生さんとのランチミーティングでは、同じ日本でも、平和教育の取り組みは都道府県によって異なることを知りました。今回、プログラムに参加したことで、新たな学びを得ることができると同時に、多様な考えに触れたことで視野が広がりました。この貴重な経験を忘れずに、学んだことや感じたことを次は私たちが大学の他の学生や教職員、地域の方々に伝えていきたいです。そして、将来は教員として、未来を担う子どもたちに過去の悲惨な出来事について伝え、平和のためにできることを一人一人が自分なりの考えを持てるような教育を行いたいと思います。貴重な学びの機会をありがとうございました。

人文学部 国際文化学科 2年生

滝澤 野の花 さん

これまでパネルの展示などでしか見たことのなかった当時の服や弁当箱などの遺品の数々を間近で見て、持ち主がこの世にいないのに物は今でもこうして残り続けるということの現実や意義を改めて考えさせられました。また、碑めぐりでは、背景を聞いて実物を見ることで、原爆の威力がどれほどのものだったか、平和への

の大勢の人々の思い、再生しようとする植物の力などを知ることができ、残酷な事実の中にもこれから先の希望も見えて、碑が伝えているのは悲しみだけではないのだと思えました。さらに、講義を通して様々な視点から原爆問題について考えることができ、どれも印象深く、自分でも講義中に出てきた事象や資料を詳しく調べてみたいと思いました。そして、三日目には広島女学院平和祈念式典に参加させていただいて、このときようやくこの8.6に対して自分事として考えられたような気がしました。それは、どこか今まで頭ではわかっていても過去のこととして捉えている自分がいたからです。しかし、参列する際、ホールに入場する前に自分の名前と住所を記入するとき、ご遺族の方々と亡くなられた方の記入欄が見えて、そこで一気に自分の心に迫ってきました。今でも終わっていない、と何度か聞いたことがある言葉ですが、ここで身に染みて感じられました。その後、ランチミーティングで今までの平和に関する活動の違いやこれからどういうことをしていくべきかを具体的に話し合い、この経験も、「今だけの知識だけでは終わらせない」という大きな意義があったように思います。今回のプログラムを踏まえて、本当に平和問題、原爆問題に対する意識が自分の中で明らかに変化しました。自分の中でまだ咀嚼しきれていないこともたくさんあるので、少しずつでも自分から理解をさらに深めていきたいです。

人文学部 国際文化学科 2年生

山口 のあ さん

今回の8.6平和学習プログラムで私が一番印象に残った講義は、西河内先生が講義された「原爆と差別」です。「知らない、理解できない」ことが差別につながるということ、また、そうした差別を政治家やマスコミが助長しているのだと知りました。マスコミは恐怖を煽るだけにしてはいけないということ、安心させようとしてであっても嘘をついてはいけないということを改めて学びました。知らないということを自覚し、知る努力や学ぶ努力をし続けることが大切なのだと思いました。知識を得てそれを行動に移して伝えられるようにしたいと思います。



人文学部 国際文化学科 准教授

## 金 耿昊 先生

私自身は、昨年度もウェブ参加をしていましたが、実際に広島に来て、一緒に学ぶことの意味を非常に強く感じました。広島という地域で続けられてきた平和学習の厚みと重みを感じましたし、それだからこそ、きわめて固有な痛みに満ちた歴史を、どのように普遍化するのか、普遍化する際にかつての歴史の重みを抜け落としていないか、そういうことをよく考えさせられました。4つの特別講義はいずれも新鮮で、特に平岡元市長の話をお聞きできたことは大切にしたいと感じました。ですが、私自身にとって最もよかったのは、広島女学院中学高等学校における平和祈念式です。かつての出来事を決して忘れまいとする、さまざまな世代の思いの一端にふれることができたこと、これも大切な経験でした。私自身が新潟の今の職場に来たのも偶然のことですが、いま住んでいる地域においてどのような平和の学びを進めることができるのか。それを考え続けたいと思います。

## 神戸女学院大学

人文学部 国際英語学科 2年生

## 上出 亜瑚 さん

今回このプログラムに参加でき、とても有意義な時間を過ごせました。ありがとうございます。私は大阪に住んでおり、8月に戦争について考える機会がほぼありませんでした。今回広島女学院大学の学生たちと意見交換をした際に、広島の学生は、みんな8月6日は必ず学校に行くというのを聞き、戦争について考える機会がありすごくよいことだと思いました。また、実際に被爆した人の話を聞くことで、次は私が聞いたこととして伝えられる機会が増えると考えました。また機会があれば参加したいと思いました。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 2年生

## 福井 咲希 さん

今まで平和に関する授業をあまり受けてこなかったもので、初めての経験ばかりでした。テレビやインターネットで知るより、実際に現地を訪れたり経験者の話を聞いたりする方が、理解が深まり戦争の悲惨さを知ることができたと感じます。たった79年前、この地で原爆が落ち、沢山の方が亡くなり、苦しい思いをしたとは考えられません。今何気なく生活できていることが、1番の平和だと実感させられました。今回のプログラムを経て、聞いて学んだ内容は後世に伝えていき、二度とこのようなことが起きないように伝え続けていこうと思いました。



碑めぐりにて

## 関西学院短期大学

保育科 2年生

## 渡邊 咲来 さん

初めて原爆に関する詳しいお話をお聞きしました。自分は何も知らなかったという事がわかりました。広島県外の人の原爆を知る機会の無さを実感し、大学に戻り三日間で学んだこと、正しい知識を話せたらと考えました。また、ニュースなどでは原爆の悲劇を伝えきれていないと思いました。悲劇だけでなく、日本が他国にしてしまったことも一緒に伝えることで、核のない世界が近づくのではないかと考えます。

## 西南女学院大学

短期大学部 保育科 1年生

## 木村 綾子さん

いろんな事が積み重なって、原爆が日本に投下されることになったのだろうけど、私は太平洋戦争の真珠湾攻撃があったために日本に原爆が投下されたのではないだろうかと思いました。

保健福祉学部 栄養学科 准教授

## 山田 志麻 先生

本学では平和学習や平和教育といったプログラムや授業等がほとんどないようです。このようなプログラムにできるだけ学生や教職員が積極的に参加し、知識や意識を高めることが必要であると強く思いました。私は栄養学科であるため、担当科目の中での啓発が難しいなあと感じております。

## 広島女学院大学

人文学部 日本文化学科 1年生

## 北崎 柚さん

広島に生まれて、今まで平和学習を受けてきた身ではあるけれど、まだ知らなかったことや、わからないことが沢山ありました。また、中国や韓国などからきた人々の被爆は全然知らないことでした。国は違えど、同じ被爆者であることには変わりないので、そうした被爆者の方々の実情も知らないといけないと思います。また、他県の人たちとの交流の中で、平和について堅苦しく考えすぎないことができたらいいいのではないかと思います。どちらかといえば日本は平和な国で、明日自分が国から徴兵され、戦場に駆り出されるということが現状ないため、平和のことについて考えると、



特別講義2「『原爆と差別』～その差別構造を理解する」西河内 靖泰 先生

学ぶという「すごい」、「真面目だね」と一種の敬遠される、他人事のように捉えられることが多いと感じます。平和について考えることは「明日何しようかな」と考えることと同じくらい身近であったら良いのと思いました。

人文学部 国際英語学科 2年生

### 徳野 七実さん

今回のプログラムを通して、新しいことを講義から多く得ることができました。私が特に印象的だったのは松永京子先生の講義です。原爆に使われていたウランやオッペンハイマーの人物について、初めて知ることが多くありました。これらの内容は私にとって衝撃を受けるものばかりでした。この講義を通して、私は原爆について知ったつもりになっていただけだったのだと感じました。原爆という出来事には多くの国、多くの人が関わっており、広島の人だけでなく、他の国の人にも多くの犠牲が伴われていることを初めて知りました。今回のプログラムを通して、もっと知りたいと思いました。

### 広島女学院平和祈念式での「追悼のことば」

79年前の今日、1945年8月6日8時15分、ここ広島に一発の原子爆弾が投下されました。多くの尊い命が奪われ、広島女学院でも学生、生徒、教職員合わせ350人余りの方々が犠牲になりました。改めて、被害に遭われた多くの方々の言葉にならないほどの痛み、苦しみ、そして皆様の平和への願いを心に刻み、ご冥福をお祈りいたします。

たった一発の原子爆弾が広島を火の海に変えてしまったこと、今まで住んできた広島が跡形もなく一瞬にして消え去ってしまったこと。

私たちは決して忘れてはいけません。私たちは今の広島を生きる者として、次の世代に繋げていく必要があります。

私が追悼のことばを述べる上でお伝えしたいことは平和教育を通して学んだこと、そして私たちが平和のためにしていかなければならないことについてです。

私は今年の2月に三戸さんによる被爆体験のお話、神奈川県にあるフェリス女学院大学の日本人学生、そして中国、台湾などの留学生の方と共に、『私たちが学んできた戦争・平和教育』、『私たちが未来において出来ること』をテーマに平和学習を受けました。

平和とは何なのか、学校でどのような平和学習を受けてきたのかを話し合いました。そこで私は広島県、県外、海外によって平和に対する教育の仕方が大きく異なっていることを学びました。

広島では多くの人が原爆による被害を知り、被害者の立場で教育を受けていますが、県外では試験のための勉強として認識されており、被害などの学習はあまりしてこなかったそうです。

更に、海外の中国や韓国の留学生は日本からの侵略や攻撃を受けてきたため、日本を加害者側として学習してきたそうです。日本からされてきたことを繰り返し学習してきたため、今回のテーマについて複雑な気持ちしていると伝えてくれました。

また、大学のチャペルアワーである「キリスト教の時間」では、ある被爆者の方のお話を伺い、別日にはその方の被爆体験の動画を視聴しました。そのお話や動画から、広島が軍都の都として広島県民の自慢であったこと、東南アジアや中国大陸への攻め込みの出発点が広島であったことを知り、多くの衝撃を受けました。被害者であるとともに加害者であると、被害を受けた御本人が仰っていたことが最も印象に残りました。

私はこれらの体験を通して、私たちの世代が平和のためにしていかなければならないことは2つあると考えました。

1つ目は、私たちが広島で原爆を知る者として原爆について、国内、そして海外にも発信することです。

私は広島で生まれ、広島で育ち、原爆について学びながら成長してきました。原爆を経験した人たちが少しずつ亡くなっていく今、責務を担っていくべきだと感じました。

2つ目は、原爆によって起きた被害だけを知るのではなく、加害した側でもあるという過ちも受け止め、戦争をめぐる愚かさを一人一人が持ち続けることです。私は今まで、被爆された方の講演や原爆資料館から見る被害を通して、被害を受けた立場で原爆や戦争について考えてきました。ですが、今回の平和学習で私たちが被害者でもあり、加害者でもあることを知った今、双方の立場として強く言えることは、二度と同じ過ちを繰り返してはいけないうことだと考えました。

多くの人は戦争は起きないと思っているかもしれませんが、私は先月、本通りで戦争反対を訴え、チラシを配っている人たちを見ました。そのチラシには現在、日本と米国が中国の動きに対して実動訓練を実施しようとしていることが書かれていました。初めて、目の前で戦争が起きようとしていると危機感を感じました。

ようやく新型コロナウイルスが落ち着き、普通といえる日常が戻ってきた今、私たちの世代が何か意思表示しなければ、本当に戦争が始まるのではないかと考えました。たった1つの戦争は、大切な家族、一緒に遊べる仲間、それらの大切な存在を一瞬で消し去ることができません。私たちは当たり前と思える日常を守るために行動していく必要があります。

この時代に生まれ、広島女学院で学んでいる者として、原爆の被害を深く学び、国内、海外の人に伝えていくこと、私たちが被害、加害の立場でもあることを忘れないこと、この二つをこれからの未来の平和を願い、追悼のことばとさせていただきます。



被爆 79年 広島女学院平和祈念式



ランチミーティング



## 2024年度 後期チャペル表（9月～2025年1月）

後期主題：「私をふりかえる」（ルカによる福音書15章11～20節）  
 “Reconsider yourself.”(Luke15:11-20)

月	日	火曜日「キリスト教の時間」 13:00～13:45 砂本記念講堂	司会	木曜日チャペル 12:30～12:50 ゲーンズチャペル
9	24	「賛美歌を歌おう」 ★聖歌隊 賛美歌のお話と歌唱指導 玉理 照子 先生（広島女学院大学オルガニスト、広島女学院同窓生、日本キリスト教団讃美歌委員）	栗津原	26 管理栄養学科 実験実習助手 佐々木 直美 さん
	1	(創立記念日のため学生は休校)		3 管理栄養学科学生生活活動報告 ヤクルトボランティア活動
	8	創立記念礼拝（138周年） 聖書：コリントの信徒への手紙一 3章6～9節 院長・学長 三谷 高康 先生 ★ゲーンズ学術奨励賞授与式	栗津原	10 人事・会計課 山岸 由佳 さん
10	15 (火)	キリスト教の時間 13:00～13:45 (砂本記念講堂) 「私を信じなさい」ヨハネによる福音書14章1～6節 講師 張 宇成 (チャン ウソン) 先生 (日本キリスト教団 宮崎教会 牧師) 司会：大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生		
	16 (水)	特別講演会 13:00～14:30 (砂本記念講堂) ★聖歌隊 「絶対に戻れる場所がある安心感」ルカによる福音書15章11～24節 講師 張 宇成 (チャン ウソン) 先生 (日本キリスト教団 宮崎教会 牧師) 司会：大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生 ★講師を囲む懇談会 14:45～15:45 (ゲーンズチャペルロビー)		
	17 (木)	木曜日チャペル 12:30～12:50 (ゲーンズチャペル) 「パイプオルガンコンサート」 演奏：大学オルガニスト 玉理 照子先生		10月25日(金) ◆学内献血 12:30～16:30 ゲーンズチャペル前
	22	主題解説「私をふりかえる」（ルカによる福音書15章11～20節） 大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生	栗津原	24 国際英語学科学生報告 山寄 有莉亜 さん
	29	大島 梓さん (MOTHERHOUSE 店舗統括者 中国・四国エリア担当) ★講師を囲む懇談会	鍵山	31 生活デザイン学科 学生生活活動報告
11	5	本学院同窓生からのメッセージ 山下 育美 先生(動物愛護 NPO SPICA 代表 本学卒業生)	中山	7 情報管理センター 小林 憲昭 さん
	12	JICA 国際協力出前講座 延原 真理奈 さん(JICA 海外協力隊隊員 派遣国：ガボン 職種：助産師)	一色	14 大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生
	19	東区連携健康講座 畝 知己 さん(JR 広島病院 薬剤師)	佐藤	21 生活デザイン学科 鍵山 昌信 先生
	26	清胤 弘英 先生(浄土真宗本願寺派 正覚寺住職・本願寺派布教使)	中山	28 児童教育学科 学生生活活動報告
12	3	中嶋 浩郎 先生(翻訳家・元フィレンツェ大学講師)	鍵山	5 児童教育学科 森保 尚美 先生
	10	広島女学院大学人権週間 こころひろshima	中山	12 日本文化学科 小松 明日佳 先生
	17	クリスマスメッセージ 橋本 真 先生(谷のゆり幼稚園 園長)	一色	19 クリスマスコンサート 学生オルガニストによる パイプオルガン演奏
	24	クリスマス音楽礼拝 演奏：弦楽四重奏 A.O. カルテット ショートメッセージ：大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生 献金ほか	栗津原	26 (冬期休暇)
1				9 院長・学長 三谷 高康 先生
	14	「学生生活を振り返って」卒業学年生による感話 管理栄養学科 早田 結菜 さん、児童教育学科 三原 奏子 さん	学生	16 卒業学年生による パイプオルガンコンサート
	21	「学生生活を振り返って」国際英語学科 中田 愛美 さん 「今年度を振り返って」大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生	栗津原	

※ 「キリスト教の時間」 演奏：玉理 照子先生(大学オルガニスト)